

豊かな “育ちあい”めざす

夏休みに小中学生対象に
「保育体験ボランティア」

以前は、兄弟・姉妹がいたり、地域で子ども同士の仲間遊びができたりして、大きい子が小さい子のめんどうをみる、子ども同士の“育ちの場”がたくさんありました。少子化が進むなかで、子どものときに“小さい子”といっしょに生活し、育ちあう機会が少なくなりました。

〔こどもの城〕の保育研究開発部では、小学5年生～中学生に幼児とのふれあいを体験してもらおうと夏休みを利用して「保育体験ボランティア」の活動を行っています。小中学生は、初めて身近に接する幼児にとまどいも多いようですが、数年前の自分の姿を思い浮かべながら、いっしょに遊んだり、身の回りの世話をしたり——“自分以外の子ども”とふれあう体験をしています。



「お兄ちゃん、作って」「こうやればいいじゃない」

小中学生と幼児のふれあいの場を作る

小中学生の「保育体験プログラム」がスタートしたのは10数年前のこと。〔こどもの城〕の幼児グループの卒業生に呼びかけて、ささやかに始まりました。最近、楽しかったからと、次の年に友だちを巻き添って参加する小中学生もいます。今年の夏休みも20人が参加。1日だけの人もいましたが、平均すると一人2～3日、多い人は5日間の保育体験をしました。

核家族化が進み、子どもの数も少なくなってきた、子どもたちがいろいろな人（同じ年の子、年上の子、年下の子、近所の大人など）とふれあいがから大きくなる機会が少なくなってきました。そこで、小中学生と幼児がふれあう場を作ろうと始めたのが「保育体験ボランティア」です。



「スライム」ってなんかいなあ

名前を覚えて、呼んでくれた

（おもしろかったこと、うれしかったこと）は——、いっしょに遊ぼうとさそってくれた／話しかけたら、お話してくれた／作ったものを一回一回みせてくれた／小さい子と私の考えの違いがおもしろかった／作った箱をとても喜んで使ってくれた／名前を覚えていて、呼んでくれた／本を読んであげたとき、「もう一回」といわれた——など。

（困ったこと、おどろいたこと）は——、なにを言っているのか、しゃべる言葉が分からなかった／楽しく遊んでいたのに、いきなり「ママ」と泣きだした／みんなが飛びついてきて下じきになり、苦しかった／片付けに協力してくれなかった／ひっかかれた——など。

幼児との出会いのなかで、小中学生は、喜びやとまどいなど、いろいろなことをほだで感じ取っていったようです。保育のスタッフは、小中学生が幼児の遊びのなかに入っていけるように、さりげなく声をかけたり、遊びにさそったりするなどのアドバイスをしています。



2歳児といっしょに朝食。ちよっとはすかしいな



「お姉さん、おねがい」「こうやればいいのかしら」

“幼児”を体験的に理解する

幼児と保育する大人との間で行われている保育の場に小中学生が加わることで、異なる年齢の子ども同士（幼児と小中学生）がふれあい・交流する場が生まれます。

幼児からみると、小中学生は年齢の近いお兄さん・お姉さん、大人に囲まれて育っている幼児にとっては、あきらめずな遊びの魅力、ぶっきらぼうな言葉に秘められたやさしさ、あたたかさを感じるのが、しんせん喜び、お兄さん・お姉さんの姿に、これからの自分の姿をかかえているようです。「幼稚園が終わりになったら、お兄さんの小学校に行くんだよね」と、期待に胸をふくらませる子どももいます。

小中学生は、幼児とかわることで幼稚園・保育所時代の自分の姿を思い出し、自分の存在や成長をすなおに認める機会になっているようです。かつての自分が、いろいろな大人の愛情のもとで育ったことに気づく小中学生もたくさんいます。「自分もそうだったけれど、小さい子の会話はおもしろいと思った。ぼくに向かって一生懸命に話しかけてくる。よく聞くと思いのない話だけど、しっかり聞いてあげると喜ぶんだな」と中学生の男子。幼児期の子どもの“はだ”を感じて理解していくようすがうかがえます。



数分でみつけた「これ、なんだろう？」

終了後のフォローにも配慮——活動記録などを送る

保育を体験して得たことを家庭や学校などの日常生活で生かしてもらおうと、終了後のフォローにも力を入れています。

一人ひとりの参加者に、〔こどもの城〕からの手紙（本人と保護者に）をそえた活動記録とスナップ写真、そして学校へ報告できるように保育体験ボランティア活動の概要をまとめた手紙（提出する、しないは自由）を送っています。

保育体験のようすを自由研究のレポートとして学校へ提出する小中学生もいます。「子どもたちの体験として、今後に生かされるたいへんよい活動であると同時に、子どもが自信を持ち、深めたりする場になっている」と、学校から感想を伝えてくれることもあります。

山田道子保育研究開発部長の語＝小中学生のときから、保育を体験することは、次世代育成支援のうえからも意義があるのではないだろうか。私たちのささやかな「保育体験ボランティア」の活動からも、幼児と小中学生が互いに育ちあう効果は大きいと実感しています。それぞれの出会いが“人”としての存在を認めあい、豊かに育ちあうことにつながっていくのではないかと思っています。